

「鐘の鳴る街会津」

早朝や夕暮れに、鐘の音に耳を澄ます。城下町に育った私たちの記憶の中には、童謡「夕焼小焼」の歌詞が実体験としてありました。暮らしの中のさまざまな営みを生き生きとよみがえらせる鐘の音は、日本人だけでなくすべての人々の心に響きます。

会津全域には195・市内には67の寺院が存在し(廃寺を除く)、小さなお堂の類いまで数えると、その数はずっと膨れ上がります。数が多いだけでなく歴史に深いかわりを持つ、高名な寺もあり、会津はまさに全国に自慢出来る仏教文化の故郷・寺の多いまちなのです。しかしながら、そのシンボルともいえる半鐘は第二次大戦中、軍事用に資材として供出されたケースが多く、また現代では、鐘の撞き手がいなく、近所から苦情が出るなどの理由で鐘を撞く機会が失われていました。ありふれた音であると思っていた音風景が、消えてゆくのはなんとも言えず寂しいものです。

『金がないなら鐘をつけ！』

昨今の厳しい経済状況の中、観光地のPR予算も伸び悩み、新しいものを作るのではなく、既にあるものをいかにして見直すかが重要になっています。

観光政策委員会（前ムービングエモーション委員会）では、2005年から『鐘の鳴る街会津』という事業を開始しました。鐘楼所有の寺院にお願いし、夕刻の同一時刻に一齐に鐘をつくというものです。

近年は「仏都会津」を観光のテーマに、全国より誘客をしていることもあり、この地に鳴り響く鐘の音は、訪れた観光客ばかりでなく、地域で暮らすわたしたちの心をも癒してくれています。

地域住民の付き合い方も希薄になりがちな昨今、鐘撞きをする事により、寺社を通してコミュニティーが形成され、地域の結び付きが強まれば幸いです。

会津若松商工会議所青年部
観光政策委員会
委員長 長尾 剛吏

